

巻頭インタビュー

元
氣

の源

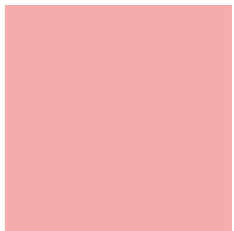
を聞いてみました

恩賜上野動物園 園長

土居利光

さん





子供の頃から「植物人間」で、大学は園芸学部造園学科に進み、都市計画を専攻しました。卒業後は東京都庁

に入庁し、首都整備局企画部に始まり緑政計画課、南多摩新都市開発本部、板橋区役所の「緑の課長」等を経て、2000年に環境局に新設された生態系保全担当になりました。新しい部署ではいつも、新規の仕事を開拓し、人間関係を一から作り上げてきました。どうやら私はそういう役回りのようです(笑)。

環境局では、植物から湧水まで生態系に関するあらゆる仕事を手がけましたよ。なかでも小笠原や伊豆諸島で、地域参加型で生態系を守る「エコツーリズム」の仕組みを作ったことが印象に残っています。エコツーリズムとは自然環境や歴史・文化等地域の魅力を観光客に伝え、その価値を理解してもらうことで生態系を守るというものです。しかし、観光客がどっと押し寄せると環境保全にマ

イナスな影響を及ぼしかねません。そこで地元の人を巻き込んで、特定区域に入るときは、必ず地元の人ガイド付きで、「ガイド1人につき観光客は何人まで」と人数規制を導入する画期的なシステムを作り上げました。このプロジェクトがようやく軌道に乗って、「小笠原担当部長」になれるなら、ずっといいなあと思っていた頃に、多摩動物公園の園長に任命されたんです。

都の環境局から動物園の園長という唐突な感じがするかもしれませんが、これまで動物と植物を一緒に扱う仕事を続けてきたので、違和感はありませんでした。そもそも「動物と植物に違いはない」というのが私の持論です。動物も植物も同じ環境のなかでしか生きられないのだからトータルで考えるべきなのです。これまで生態系にかかわる仕事をしなくて、そのなかで動物への理解も深めていたので自信はありました。「動物と植物は同じ」という理念のもと、多摩動物公園では沢山の改革に取り組みしましたが、結局仕事ってコミュニケーションに尽きると思います。いかに自分の熱意を相手に伝えて、動いてもらうかということですね。とはいえ現場を知らないと思え

対象を生かすことで、よりよい環境をつくる。 これが私の使命です。

することもできない。ですから着任してすぐに、セクションごとの担当者と、全ての現場へ同行して、掃除や餌やり等動物の飼育体験をしました。気が知れてくると、みんな色々教えてくれます。助けてくれる人や「一緒にやろうよ」と言ってくれる人がいないと仕事はできないでしょう。多摩動物公園には都庁時代の仲間もたくさんいて、多くの人に助けられました。そして6年後、上野動物園の園長を任されることになったのです。就任翌年に、ジャイアントパンダの「シンシン」の赤ちゃんが亡くなったことは忘れられません。上野動物園でパンダの赤ちゃんが産まれるのは24年ぶりだったので本当に残念でした。誕生して7日目に肺炎を起こしたのが死因でした。実はパンダの赤ちゃんは生育が難しく、特に生後1週間以内に死亡する率が高くなっています。飼育員は実によくがんばってくれました。記者会見での私の涙についてよく話題にされるのですが、その涙の理由はパンダの死が悲しかったからだけではなく、飼育員の熱意も知らない記者たちに「職員のミスではないか」と言われたことが心外で、憤りを感じたからなんです。でもその後、上野周辺を歩いている時に地元の方々が「大変

だったね」と声をかけてくださって、思わず

土居利光さん 恩賜上野動物園 園長

東京都出身。千葉大学造園学科卒業(1975年3月)、東京都首都整備局企画部に採用。環境局生態系保全担当課長、自然公園課長として小笠原・御蔵島へのエコツーリズムの導入など自然保護の仕事を行った。2005年に多摩動物公園園長、2011年から現職。2010年4月から首都大学東京客員教授。専門は、造園学、自然保護政策、動物園学。『「大人のための動物園ガイド」(共著) 養賢堂』、『「動物園学入門」(共著) 朝倉書房』、『「上野地域におけるジャイアントパンダの社会的意義」『観光科学研究』第8号, 2015』他著書、論文多数。

INFORMATION

恩賜上野動物園

明治15年に開園した日本で最も古い動物園。約500種の動物を飼育し、年間入園者数は日本一です。近年はトラのコーナーに密林の雰囲気演出する等、飼育環境を自然に近づけています。ジャイアントパンダ、オカピ、コビトカバの世界三大珍獣は必見。
◎東京都台東区上野公園9-83
<http://www.tokyo-zoo.net/zoo/ueno>